

インフレーション(インフレ)の足音が少しずつ近づいている。ウクライナ情勢を受けて、原油や天然ガスの価格は近年にないほど高騰し、小麦をはじめとした食糧価格も高くなっている。こうした原材料や燃料の価格はまだ日本の消費者物価に十分に反映されていない。ただ、消費者物価が本格的に上昇を始めるのは時間の問題であるように見える。

ここ30年ほど、日本はインフレからは無縁であった。ただ、それ以前はインフレが経済の基本的な流れであった。私たちの世代が若い頃学んだ経済学でも、インフレに関するものが多かった。その中でしばしば使われた用語に、ダイヤモンド・プル型とコスト・プッシュ型のインフレという分類があった。

需要が異様に拡大して価格が高騰していく現象をダイヤモンド・プル型

学習院大教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

のインフレと呼ぶ。例えば、不動産バブルなどで需要が膨れ上がり、それが物価にも反映するものだ。これに対して石油価格や食糧価格などが市場の異変で高騰したり、構造的な要因などで賃金の上昇したりすることで、企業の費用が高くなり、それが物価上昇に反映されることをコスト・プッシュ型のインフレと呼ぶ。

スタグフレーションの影響

どちらのケースでも、インフレは好ましいものではない。ただ、ダイヤモンド・プル型のインフレであれば、需要拡大を抑えるような景気引き締め的な経済政策で対応できる面がある。一方で、コスト・プッシュ型の場合には、原因となる原材料や賃金の価格上昇を抑えることができない限り、物価上昇を止めることは難しい。

現在世界に広がりつつあるインフレは、典型的なコスト・プッシュ型のインフレである。ロシアからの石油や天然ガスの供給が遮断され、ウクライナからの小麦の輸出が止まり、そして物流の混乱などでさまざまな財のサプライチェーンが目詰まりを起すことで、原燃料のコストが上がり、物価を押し上げている。

しかも、一方で物価が上がるというインフレ状態でありながら、同時に景気が悪いスタグネーション(不況)という状況にある。これをスタグフレーションと呼ぶ。

1970年代に中東戦争とイラン革命という二度の大きな出来事で世界の石油供給が混乱し、石油価格の高騰(石油ショック)とインフレの

悪化が起きたことがある。この状況もスタグフレーションであり、当時の世界経済は長期間、この影響に苦しんだ。

今回のウクライナショックによりスタグフレーションがどの程度長期化するのか、今の段階では予想するのは難しい。ロシアが仕掛けた戦争が、そしてその後の混乱がどの程度長期化するのかに依存するわけだが、その流れを読むことが非常に難しい。いずれにしても、今回起きた大きな混乱は、政治や安全保障における意味はもちろん、経済的なインパクトでも何十年に一度という深刻なものである。世界経済への影響という意味では、コロナ禍以上の影響となるかもしれない。今の時点であり悲観的な予想をするべきではないが、今後の物価の動きについては注目してほしい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。

無断転載、複製を禁じます。